ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.11 November 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

11

CONTENTS

- 巻頭言
  土壌の質
  ／永尾教昭 1
- 「おさしづ」語句の探求（43）
  「おさしづ」第６巻における刻限／本席身上伺と「道」
  ／澤井治郎 2
- 日本語教育と海外伝道（28）
  新型コロナウイルスと日本語教育②
  ／大内泰夫 3
- イスラームから見た世界（７）
  天理教とイスラームの出会い⑤―戦前・戦後のイスラーム認識
  ／澤井　真 4
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（26）
  オンライン上のキルケゴール―電脳空間の中の哲学
  ／金子　昭 5
- 宗教伝統における聖典の意味構造（３）
  インドにおける「語られる聖典」とその伝承
  ／澤井義次 6
- 遺跡からのメッセージ（63）
  大和の文化遺産を学ぶ①　－杣之内キャンパス周辺から－
  ／桑原久男 7
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（37）
  閑話：熱帯雨林の話
  ／森　洋明 8
- 天理参考館から（22）
  スポーツの歴史と文化（３）「走る」その３
  ／幡鎌真理 9
- 図書紹介（120）
  『神を待ちのぞむ』
  ／金子　昭 10
- おやさと研究所ニュース 11
  第 333 回研究報告会（八木三郎）
  ／第 21 回宗教倫理学会に参加（堀内みどり）
  ／第 79 回日本宗教学会に参加・発表（堀内みどり）／『グローカル天理』年間購読のご案内／ 2020 年度公開教学講座の案内

巻頭言

土壌の質

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

天理教には青年会や婦人会があるが、この会活動が教勢発展に大きく寄与してきたのは紛れもない事実である。そして基本的には、海外でも性別で分けるこの会活動は維持されている。

ある国で、毎日のように一緒に近くの天理教拠点に参拝をしていた現地人夫と日本人妻の夫婦があった。欧米社会では、夫婦で行動を伴にすることがごく普通だ。ところが、ある日、夫が妻から「今日は婦人会の会合だから、あなたは参拝に行ってはいけない」と言われ激しく気落ちした。

筆者が天理教ヨーロッパ出張所長在任中、若い信仰者たちから、性差を超えて男女一緒に活動をし、結果多くの若者が繋がってきたが、これをこのまま続けて良いのかと相談を受けた。筆者は当然即座に許可した。そもそも会活動は教勢の進展や会員の教理研鑽のための手段であって、会活動それ自体が目的ではない。もしそれらが、上記夫婦の例のように信仰活動の妨げになるなら本末転倒も甚だしい。

天理教婦人会は、1910（明治 43）年に設立されるが、婦人会を設立せよとの「おさしづ」（主に、教祖が身を隠した後、本席飯降伊蔵によって伝えられた神言）は、さらに早く 1898 年に出されている。それは「婦人会始め掛け。」（明治 31 年 3 月 25 日）、「男女の隔て無いと言う理は、重々の理に諭したる。……この道、男だけで、女は世界へ出さんのか。」（明治 31 年 3 月 30 日）というものだ。

当時の日本社会における女性は、政治的には 1890 年の「集会及び政社法」で政治的演説会への参加や政党への加入は禁止されていた。もちろん選挙権はない。教育の面では、大学など高等教育機関へは、例外を除いて女性は入れず、主に裁縫などを教える女学校があった。帝国大学は事実上女性を締め出し、ようやく 1913 年に東北帝大（現東北大）に初めて 3 名が入学した。1898 年制定の民法でも、女性は結婚すると法律上の能力を有さず、夫の許可を必要とした。

このような時代に、上記の「おさしづ」が出されている。これは画期的なことだろう。「女は世界へ出さんのか」の「世界」とは、必ずしも海外を意味するのではなく、一般社会のことである。つまり、家に閉じ込められていた女性を社会に進出させることを促しているのであり、男女が一緒になって教団の進展のために尽くすことを要請されているのだと思う。ところが、時間が経過するにつれて、先に述べた夫婦のように、男女が別々に活動することが趣旨であるといった誤解をしている面はあるだろう。

では、海外、とりわけ欧米社会に天理教の布教が進捗していくのに、青年会や婦人会など性別で分けた会活動は、むしろ足枷になるのか。筆者は、そうは思わない。なぜならば、欧米発祥の女性だけの団体も決して少なくないからだ。女性同士で集まることの意義があるからだろう。例えば、国際ソロプチミストは 1921 年にアメリカで設立され、現在世界 128 カ国で活動している。

昨今変わってきたとは言え、日本では大勢が集まると、男性、女性と自然に席も分かれることが多い。それに対して、欧米では交わることが普通だ。そこに性別で分けた会を持っていくときは、それなりに工夫はするべきだろうと思う。

要するに、日本で生まれ育った植物をそのまま海外で植えたら、土壌の質が違うので立ち枯れをすることがある。だから土ごと日本から持って行こうとする。つまり日本人コロニーを作ってしまう。しかし、これは海外布教ではない。海外布教とは日本で育った植物を、その国でも大きく育ち、繁殖していくように、やや品種改良することだろう。

「おさしづ」語句の探求（43）

「おさしづ」第６巻における刻限／本席身上伺と「道」

天理大学人間学部講師
おやさと研究所兼任研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第６巻（明治35～40年）の「刻限」と「本席身上伺」における「道」の用例を整理する。第５巻までは刻限と本席身上伺を別々に整理してきた。しかし、第６巻では、本席の身上の障りをきっかけにして「刻限」の「おさしづ」となる場面が多く、また、本席身上伺は刻限と同様の位置を占めるとされることから（『天理教事典 第三版』「刻限話」の項目参照）、今回はこの二つをまとめて取り上げることにしたい。

第６巻には刻限と本席身上伺の「おさしづ」があわせて47件ある。そのうち、「道」が用いられるのは33件、３回以上「道」が繰り返し用いられるのは18件である。

第６巻に集録されている「おさしづ」は207件（巻末の教会事情除く）あり、年平均にすると約35件と、これまでの巻にくらべて格段に少ない。そんな中、特に明治40年に刻限と本席身上伺の「おさしづ」が多く、この年の「おさしづ」の半分以上を占めており、ほかの巻にくらべてその存在感が際立っている。

そんな事でこの道どうなるぞ

第６巻の刻限／本席身上伺を「道」の用例に注目しながら読むとき、強い印象を受けるのは次の「おさしづ」である。

「一万二千足らんと聞いた。そんな事でこの道どうなるぞ。これでは働けるか働けんか。さあしっかりせい。教祖にこの道譲りて貰ろたのに、難儀さそうと言うて譲りて貰うたのやない、言うて居た日あるのに、何と呆けて居る。……道は、皆継目あるで〳〵。継目知りて居るか〳〵。知らずに何と呆けて居る〳〵。皆んな取損いして居る〳〵。教祖という道内から潰して居る。世界の道で立ってあるか〳〵。学問で立つと思うか。」（さ40・3・13　平野楢蔵とお話しありし時、俄かに刻限の話）

このようにかなり厳しい口調で、現状に対して叱咤激励されている。ここで「道」について注目すべきことは、「この道」は教祖から譲って貰ったもので、教祖の道を受け継ぐべきものであり、それは、「世界の道」や「学問」、つまり、社会の常識とか世間の論理とはまったく異なったものによって成り立っている、ということである。

この道というは、一つ理という

それでは、「この道」は何によって成り立つか。それについて、「一つ」という言葉を用いて説かれる場面が多い。

「一つ理を治めば、何も言う事無い。神の道望み、神直（す）ぐ一つの道に、横道通るからどうもならん。」（さ38・5・11　本席身上御障りにて声出ずに付願）

ここでは「一つ理」を治めること、あるいは「神直ぐ一つの道」を通ることが大事とされ、「横道」を通ることが戒められている。この「おさしづ」から数日後、その「横道」とは一体どういうことなのか、あらためて伺われている。

「この道というは、一つ理という。皆んな一つの理である。一つの理というは一つの心、一つの心ならこそ、これまでの道という。これから先はなか〳〵の道、容易ならん道である。容易ならんと言えば、どうなろうと思う。よっく聞き分けにゃならんで。これまで外の事にて、あちらこちら取り混ぜのようになったる。それを横道と言うのやで。……神の道は直ぐ。一つの道は神の道。」（さ38・5・16　過日のおさしづより一同相談致しまして、……尚横道という処をおさしづ下され度く願）

「この道というは、一つの理」と言われる。また、「一つの心」とも言い換えられている。これは、単に複数の心をあわせて一つにする、ということを意味しているのではなく、皆がそれぞれに「一つの理」ないし「一つの心」を治めることを諭されている。「あちらこちら取り混ぜ」になるのを「横道」と言われる一方で、「一つ」というところを心にもって、一筋に歩むのが「神の道」であると説かれている。同様の用例には、「国のためと言うて、存命果たす者もあろう。又この道というは、尚も心一つに治めてくれにゃならん。」（さ37・11・2　本席身上御障りに付願）というものもある。

教一つの理から年々に道

その「一つ」というものが何であるのかについては、次の「おさしづ」に示されている。

「初めは軽き些かな心を伝えて道出けたもの。一時初めから一分始終出けやせん。よく聞き分けてくれ。これまでの道容易ならん道、教（おしえ）一つの理から年々に道出来て来たる。よう聞き分けにゃならんで。これがいかん、どれがいかん、教一つの理を放って了（しも）て、世界一つの理取り運び、通ろうと思たて通れやせん。」（さ37・7・27　本席身上御障りに付願）

ここに端的に記されているように、この道は「教一つの理」によって、年限かけて徐々にできてきたものである。したがって、「教一つ」を放っておいては成り立たない、通れない道なのだと説かれている。また次のようにも言われる。

「最初掛かりから四十四五年。この事見れば、今は勇んで跳び上がってするようなもの。一寸困難、困難の筈や。人が知らんから困難。困難の道無くばならん。その時見て先になったらこう成る。何処から何処までこれだけなあ〳〵、追々に出来たるその時から話しある。往還の道や。秋了（しも）うたら楽しんで。この秋やろうか〳〵、秋を合図に出て来る。もうやろうかどうやろうか言い〳〵随いて来たるは今の道や。これさえ忘れねば案じる事要らん。」（さ40・5・30　午後10時　本席御身上又々激しく相成り、刻限の御諭）

まだ、より来る人もほとんどいないようなときから、教祖は先の「往還の道」を楽しみに歩みを進めるように教えられた。その教えを頼りに、「もうやろかどうやろうか言い〳〵随いて来た」。それによって何万という人が集う「今の道」があると言う。

ここに、この道の歩み方が諭されている。一般に「道」という言葉は、ある方向へたどり行くというニュアンスを持っているが、「この道」は教祖の「教一つ」を頼りに、その方向へとたどって行くことによってできてきたものである。したがって、これからも、その「教一つ」を求めて一筋に歩みを進めることによってのみ「道」は続いていくのである。こうした「道」の要点が、第６巻の刻限／本席身上伺の用例から読み取ることができる。

新型コロナウイルスと日本語教育 ②

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

リアルタイム型授業

オンライン授業といってもいろいろな形式がある。なかでも、ZoomやLINEなどのTV会議システムを使って、遠隔地にいても同じ時間にネットワークを通じて集まり、授業を行う形式が代表的なものである。具体的には遠隔地にある学校で、その科目を担当する教員がいない場合など、隣町の学校の教員がインターネットを利用して映像や音声を送り、大型のスクリーンやテレビに双方の様子を映し出して、まるで同じ空間で授業を行っているようにできるものだ。こういった試みは1990年代中頃から実験的に行われてきた。遠隔地でも教育を受けたいというニーズがあり、それを解決するために情報通信技術が活用されてきたと言える。このメリットは「双方向性」があるために、教員と学生が対話できる点にある。音声や映像を通して双方向的にやり取りができ、同じ時間に遠隔地でも授業が受けられるのである。しかし、それは見方を変えればデメリットにもなりうる。たとえば海外の場合など、時差の関係でできないこともある。筆者も新型コロナウイルスで一時帰国後、再来日できない学生のためにZoomを使ってみたが、韓国、台湾は1時間の時差で問題ないものの、インドの学生の場合、午前の授業だと早朝にアクセスしてもらわなければならないということもあった。ヨーロッパやアメリカではなおさら困難である。また海外の事情として、通信ネットワーク環境の「質」が問題になることもある。

オンデマンド型授業

教育方法の柔軟性を高め、多様な学習者のニーズを満たすために、従来から通信教育が行われてきた。できるだけ学習者の自学自習が可能な環境を用意する必要があり、ラジオやテレビを利用した講座から、インターネットの普及に伴って、Webベースのオンデマンド学習も増えてきた。インターネットを利用することで時間、空間を超えた遠隔授業が可能になり、扱えるメディアも増え、自宅での学習もこれまでに増して濃密な学習が可能になったと言える。オンデマンド型のメリットは、文字、音声、静止画、動画などを自由に扱い、学習者の動機付けを高め、興味や関心を引き付けることもでき、またモジュール化された教材を配信することにより、時間や空間の制約を受けずに自由に受講できる点である。しかし、インタラクティブ性はなく、一方通行で配信されたものを視聴し、学習していくという点はデメリットでもある。そのデメリットを補うためにBBS（Bulletin Board System）を使うことも行われてきた。現在はYouTubeなどを利用することで、大掛かりな設備や機材を導入することなく、手軽に教員が動画を作成し、配信することも可能になり、また双方向性も補う意味で他のソフトを併用することも盛んになっている。

ハイブリッドな授業

オンライン授業には様々な形式が考えられるが、一つの形式にこだわることなくメリット・デメリットを考慮し、組み合わせながら授業を組み立てていくことができるのではないだろうか。講義形式で知識を伝達していく部分に関してはオンデマンド型でWeb上に公開し、教師が予習や復習として済ませる形にしておき、対面でインタラクティブに行いたい部分に関してはZoomなどを使ったリアルタイム型の授業を行っていけば、効果的な授業を行えるのではないだろうか。現在ではパソコン、Webカメラ、マイクがあり、インターネットに接続されていれば、すぐにでも授業の動画を作成することができる。パソコンは文字、音声、写真、動画などメディアを自由に扱える点で自由度が高い。具体的にはPDF化したテキストやCD･DVD教材、パワーポイントファイルなど、使える素材を準備しておき、授業の構成を考え、準備を整えてから画面キャプチャーソフトで録画して動画を作り、あとはYouTubeにアップロードすればよい。学習者には動画を視聴しておくように指示し、時間を決めてZoomで集まる。その時にはすでに授業の内容は動画で予習しているはずなので、それを補完するようなことを行えば無駄がない。知識を小出ししていくような講義形式の授業ではなく、学習者の質問や意見をベースに討論主体のような授業を展開することもできる。つまり一方的な知識の詰め込み型授業形式ではなく、学習者と共に考え、学ぶという形式の授業になり、教師側も学習者とのリアルタイムなやり取りの中で共に学んでいくことができる。また単位の面でも通常90分の授業なら、オンデマンド型を20分×2回で40分、リアルタイム型で50分やることで学生にも負担をかけずにできる。受講者側の環境を考えると、パソコンを使う学生もいればスマートフォンの小さな画面で受講している者もいる。通常の授業と違って90分も画面を見続けられるものではない。筆者はこのような考え方で新型コロナウィルスの影響で対面授業のできない間、オンライン授業を行ってきた。しかし、新たな問題や課題も見えてきた。

問題点や課題

安定した通信環境、またそれに伴うパケット料の問題、スマートフォンやパソコンなど不揃いの接続機器の問題、Zoomの場合、カメラ映像の停止、ノイズ除去のためのミュートなど、機器を導入した場合の授業ではある程度、ルールも決めておかないと効果的な学習は望めない。それはオンライン授業を行った教員だれもが感じていることだと思う。以前、LLやパソコンなどの機器を導入する意義について研究していたことがあるが、それらの機器を積極的に導入するのは学習効果を高めるためであり、必要性がないのに導入しては経費の無駄遣いになると考える。また機器導入で操作を覚える時間的な浪費も起こる。

しかし、今回の新型コロナウィルス禍では、従来行ってきた「授業そのもの」が機器を導入しなければ行えなくなってしまったという点で、大きな混乱が起こった。さらに言えば、普段からパソコンに慣れ親しんでいる人と、機械に対して苦手意識のある人の間で大きな溝ができたようにも思う。その溝を埋めるためにサポート体制や専門家の配置などを整えていくべきだと思うが、未曾有の事態で対応ができなかった教育機関も多かったのではないだろうか。また新聞記事で読んだが、今年大学に入学した1年生が入学以来、一度も登校していない、友達もできない、授業はすべてオンライン、クラブ活動もできないという学生もいる。入学以来、ずっと朝から夕方までオンライン授業でパソコンとにらめっこでは、自分はいったい何をやっているんだろうと思うのも無理はない。

天理教とイスラームの出会い⑤―戦前・戦後のイスラーム認識

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

天理教がイスラームに関心を抱いた最大の理由は、ムスリム（イスラーム教徒）への布教の一環としてであったと思われる。戦前の文脈において、「イスラーム」とは、中国や満州、そして東南アジアにおけるイスラームが射程に入れられていた。日本国内において、イスラームがはるか異国の遠い存在であったのに対して、海外へ布教に赴いた天理教の布教師たちにとっては、イスラームは身近な存在であった。

このことにいち早く気づいたのが、中山正善２代真柱であり、また諸井慶徳は学術的なイスラーム研究を推し進めていた。第２次世界大戦前には、教外の宗教学者の寄稿を交えながら、天理教亜細亜文化研究所を中心に研究が進められていた。それらの研究成果については、『天理時報』や『日本（やまと）文化』などの刊行物が主な発信媒体となっていた。そして、イスラームの動向への注視は、第２次世界大戦後も続いていった。

石橋智信の講演

『日本文化』は天理図書館の機関誌として出版されていた頃から、多くの宗教学者たちが寄稿していた。たとえば、石橋智信（1886 ～ 1947 年）は、ユダヤ教やキリスト教に関心を抱いた宗教学者であった。彼は 1939（昭和 14）年に中国に渡航しており、現地ではイスラームやキリスト教をはじめ、天理教や神道の状況を観察した。そして、1940 年４月 11 日に天理図書館講堂で、「支那の宗教事情」と題した講演を行っている。時局と連動し、イスラームについての関心が日本国内でも高まっていた時期である。

> 興亜院からの派遣命令は勿論宗教一般についてゞありますが、特に回教を取しらべて来いといふ事でありました。それで私が回教に注意しましたのは、我が国でモハメット教と云ひますと、教祖マホメットと聖典コーラン位にしか思つて居らない。回教への注意は、回教を信ずる国、民族、云はゞ回教圏が問題になって居て、宗教としては、一向問題にしてゐない。[1]

興亜院とは、1938（昭和 13）年に設立された国家機関であり、おもに中国大陸を中心とした情報収集に当たっていた。石橋は、中国の宗教のなかでも特に回教、すなわちイスラームを中心とした調査依頼を受けたようである。しかしながら、日本におけるイスラーム認識を振り返ってみれば、イスラームという「宗教」ではなく、むしろイスラームに関連する国家、民族、また地域などが紹介されているにすぎない。石橋はこうした実感を、渡航の前年、東京の松坂屋で開催された展覧会で抱いたようである。

イスラームが「宗教」であるという認識が希薄であることについて、石橋は、「宗教の問題など、問題にしないで支那の回教に対して安心して居るのはゆゝしい大事であります」と述べている。[2] それは、スンナ派やシーア派などの諸派についての知識なしに、イスラームを理解することは不可能だからである。そこで、石橋は、イスラームの諸派を論じたことで知られるシャフラスターニー（Tāj al-Dīn al-Shahrastānī, d. 548/1153）に言及しながら、中国や満州に法学者のアブー・ハニーファ（Abū Ḥanīfa, d. 150/767）の「ハニーファ派」（ハナフィー派のこと）が拡がっていることを指摘した。

宗教と国家の関係

また、古野清人（1921 ～ 1979 年）は、南満州鉄道東亜経済調査局に在籍した後に、民族研究所第３部（中部・西部アジア）や第５部（東南アジアやインド太平洋圏）へと移籍した。２代真柱との親交もあり、戦後、天理語学専門学校の校長を務め、天理大学の開学にも大きく寄与した。彼は、『天理時報』に東南アジアを中心とした宗教状況を連載したこともあった。

第２次世界大戦後、植民地支配を受けてきた諸地域が次々と独立したが、それらの多くはいわゆる「イスラーム地域」であった。そのため、宗教と国家の関係性を理解することは、日本を含む世界の行く末と密接に結びついていた。

「世界における宗教の現状」（『日本文化』35 号、1955 年）のなかで、古野は、「ヨーロッパから見れば、今日では東洋は先ずイスラム圏から始っている」と述べ、イスラームの影響力がますます高まっていくことを予見した。[3] そして、パキスタンをはじめとするイスラーム国家の誕生のなかに、宗教復興の機運を見出した。激動する世界情勢を見通しながら、彼は、世界宗教の展開に国家との結びつきが不可欠であったことを指摘した。

> この変動激しい時代に西欧的な技術と文化を排斥するようなイスラムの世界社会（*Umm Islam*）を建設しようとしても、その社会構造は過去の回教王国（ハリハ）みたいなものになる惧れがある。諸国家における現在のイスラム運動はむしろその熱狂的で暴力的な一派の宗教的不寛容と排他性からくる現行の秩序と組織に対する破壊的行動に重大性が認められる。[4]

ここでいう「回教王国」とは、カリフ制、すなわち宗教的権威と政治的権威が一致する政治体制のことである。古野は、第２次世界大戦への反省を踏まえつつ、政治と宗教の関係性に注目していた。それは、「宗教」を排除しようとする当時ソビエトの社会主義においても、「宗教」を政治に取り込もうとするパキスタンの宗教復興においても、イスラームが重要な役割を果たしていたからである。

宗教文化研究所員によるイスラーム考察

戦前の天理教亜細亜文化研究所から天理大学に移管、改称された宗教文化研究所でもイスラーム研究が継続されている。研究所員による報告としては、諸井慶徳の「回教（イスラーム）要説」（『宗教文化研究所報』12 号、1951 年）、中村孝志の「南方地域の宗教伝播　インドネシヤ」（『宗教文化研究所報』16 号、1952 年）などがある。イスラームの基礎知識から、戦後の国家状況におけるイスラームの役割が言及されている。

また、塩谷敏明が「回教儀礼―清浄の部―」（『日本文化』24 号、1946 年）、「イスラムの寺院と礼拝」（『天理文化研究所報』５号、1949 年）と題して、イスラームの礼拝前の浄めの儀礼や礼拝に関する小論を発表している。

このように、戦前のイスラーム認識が乏しい状況においても、また戦後のめまぐるしい宗教情勢においても、研究所ではイスラーム情勢は途切れることなく研究されていたのである。

［註］

（１）石橋智信「支那の宗教事情」、『日本文化』（18 号）、1940 年、２頁。
（２）同上、４頁。
（３）古野清人「世界における宗教の現状」（『日本文化』35 号、1955 年）、40 頁。
（４）同上、47 頁。

オンライン上のキルケゴール―電脳空間の中の哲学

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

「キェルケゴール協会」Zoom 読書会

コロナ禍のため中断していた「キェルケゴール協会」大阪月例読書会が今年８月、オンライン（Zoom 会議）で再開し、私も初めて参加した（実は読書会そのものも今回初参加である）。この読書会は、2016 年秋より、桝形公也大阪教育大学名誉教授の指導の下、伊藤潔志桃山学院大学准教授が世話人となって始められた。内容はデンマーク語原典でキルケゴールの日記や書簡等を読むというものだ（同様の読書会は東京でも行われている）。大阪で毎月開かれていた読書会であるが、オンライン方式になって、逆に参加しやすくなったのは有難いことだった。

参加して驚いたのは、キルケゴールのデンマーク語テキストが、その著作類はもちろんのこと、日記や書簡等も含めてすべてデータベース化され、ウェブ上で公開されていることである。紙媒体の本を買い揃えなくても、キルケゴールの全著作は電脳空間の中に存在しているのである。読書会の参加者は、“Søren Kierkegaards Skrifter” というホームページ（http://sks.dk/forside/indhold.asp）からテキストを事前に各自ダウンロードし、桝形先生が作成された当該部分のデンマーク語単語ノート（これも事前配信）に基づいて予習した上で、実際の読書会でテキストを順番に訳読する。その後に、桝形先生が丁寧な解説をつけていかれる。読書会といってもデンマーク語の学習を兼ねた高度な勉強会である。テキストを原語で読む勉強会は、私にとっては大学院のゼミ以来、実に 30 年ぶりのことだ。21 世紀の日本人によって自分の手紙までもオンライン方式で読解されるとは、キルケゴールは夢にも思っていなかっただろう。

「キェルケゴールのインターネット批判」

19 世紀デンマークに生きたキルケゴールにとって、同時代のジャーナリズムはせいぜい新聞か雑誌の上でのものであった。彼は風刺新聞『コルサール』に戯画が載せられ、嘲弄されるという悲痛な体験を味わわされた。そのこともあって、ジャーナリズムやこれに相関した大衆という存在に対して、彼は徹底的な批判を行った。単独者の概念も、実はこうした実体験を反映していると言えるだろう。

19 世紀の先端メディアが日刊新聞であるとすれば、20 世紀は放送（ラジオやテレビ）であり、21 世紀の現在ではインターネットが大きな地歩を占めている。もしキルケゴールがインターネット、とりわけソーシャルメディア（SNS）の普及した今日の世界を見たら、何と言うだろうか。そんな問いに答えるのが、パトリック・ストークスの「キェルケゴールのインターネット批判」である。[(1)] ストークスはキルケゴールのメディア批判をさまざまな角度から論じているが、面白いのはストークス自身の SNS 観を披歴した部分である。

SNS 上では、「いいね」やリツイートという“報酬”が利用者に与えられる。そのことによって、本来のコミュニケーションのコンテンツ（内容）よりも、コンテンツの単位（「いいね」やリツイート数）という人気に関心を移行させる。その結果、コンテンツの価値や重要性とは関係なく、クリック数を最大化させるべく、コミュニケーションが「仕立てられる」。そのようなコミュニケーションの自己目的化は、貴重な情報もどうでもよい情報をもすべてごちゃ混ぜにして、のっぺらぼうに標準化（キルケゴール的に言えば水平化）してしまう。ストークスはこうした現象を SNS のウイルス的性格と呼ぶ。かくして仮想コミュニケーションばかりが自己増殖するのである。

そこでは、コンテンツの悪しき標準化のみならず、コミュニケーションの非人格化という事態も生じてくる。その悪しき姿が「炎上」の発生であり、「荒らし」や「釣り」の横行である。バーチャル空間の言論が、時に人々のリアルな生活をめちゃくちゃにしたり、死に追いやったりするが、SNS にはそんな危険性があるというのである。

しかし、このような危険性を自覚して注意深く SNS を利用しさえすれば、インターネットは民主主義の有効なツールであり、人々を双方向的かつ開放的に結びつけ、草の根レベルから情報を発信していくメディアになりうる。ストークスはこのように結論づけている。

キルケゴールの“新作”が出現？

話を電脳空間の中のキルケゴールに戻そう。キルケゴールのデータベース、いやデータベースと化したキルケゴール。そこから当然、コンピュータを駆使したキルケゴール研究も現れてきた。例えば、彼のある言葉の使用回数と、それが使用されたセンテンスを検索して抽出し、これらを時系列に一望可能なグラフ上に配して、この時期のキルケゴールはこの言葉をこういう文脈で使用していると解説するような研究がそうである。私は、キルケゴールだけではなく、この種の研究をヘーゲルにおいても読んだことがある。

客観性・正確性を標榜するこの種の研究は、昆虫を展翅板上に並べた標本箱のような印象を与える。確かに昆虫たちはきれいに分類されて並べられている。しかし、その昆虫はすべて死んでいるのである。思想は著作の中に客体化されて存在するとはいえ、それを生きた思想として命を与えることができるのは、生身の人間が主体的にテキストを読み込んだ時なのだ。人文学の研究は、本来そのようなものでなければならない。

キルケゴールは、大学教授たちによって自分の著作がパラグラフ単位に切り刻まれて研究されるだろうと予言した。だが、まさかセンテンスや単語のレベルにまでバラバラにされることになるとは、決して予見できなかった。今日のように、人工知能（AI）の時代では、もっと恐るべき予想がなされうる。

いつか近い将来、AI がキルケゴールのデータベースを用いて、情報処理のアルゴリズムを駆使し、電脳キルケゴールの著作を紡ぎ出すことができるかもしれない。これは決して SF の世界の事柄ではない。すでに音楽においては、AI によるバッハやベートーヴェンの“新曲”が作曲されているというではないか。

だが、そうなってしまっても、それが本当にキルコゲールの生きた思想になり得るのだろうか。いや決して。バーチャルリアリティはどこまでもバーチャルリアリティに過ぎない。生きた思想は、生きた人間のリアリティの中でしか生まれてこないのである。

［註］

(1) パトリック・ストークス「キェルケゴールのインターネット批判」（的場敦也訳）、『新キェルケゴール研究』第 18 号、キェルケゴール協会、2020 年、31 ～ 53 頁。

インドにおける「語られる聖典」とその伝承

天理大学名誉教授
おやさと研究所嘱託研究員
澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*

宗教伝統において、「語られる聖典」が長年にわたり担ってきた意義、および信仰者にとっての聖典の意味を理解するためには、具体的な宗教の事実にもとづいた再検討が求められる。ここでは、インドにおけるヒンドゥー教聖典を具体例として取り上げてみたい。

「語られる聖典」とインド学の誕生

インドにおいて、『ヴェーダ』などの聖典は、「語られる聖典」として、長年にわたり親の代から子の代へ、さらに孫の代へと世代を超えて口頭伝承されてきた。文字に依ることなく口伝に依って伝授されてきたのだ。聖典テクストの写本も確かに作られてはいたが、それはあくまでも記憶にもとづく伝承を補助する手段であった。『ヴェーダ』が文字化されて「書物」としても読まれるようになるのは、近代以降になってからであった。

人びとの信仰を支える『ヴェーダ』は、口頭伝承で語り継がれてきた。それらはエクリチュールとしてではなく、パロールによって、すなわち声と記憶によって伝承されてきた。こうした聖典継承の家系に属する学者は「パンディット」(サンスクリット語では、paṇḍita）と呼ばれてきた。『ヴェーダ』に通暁していた彼らは、専門的な知識をもつ教師として、「語られる聖典」の伝承に重要な役割を果たしてきた。

こうした「語られる聖典」をもつインド文化は、近代ヨーロッパにおける諸学問の成立に大きな影響を与えた。わが国におけるヴェーダ学の碩学、辻直四郎によれば、18 世紀頃までは、『ヴェーダ』を秘守し資格のない者に教授してはならないとの『法典』(dharmaśāstra）の規定などもあって、キリスト教布教師たちは『ヴェーダ』に関する正確な知識をもつことができず、『ブラーナ』(古譚）の内容をもって『ヴェーダ』のそれと誤認したこともあったという。[1] そうした中、18 世紀後半になって、ヨーロッパでインド学（インドロジー）が誕生した。サンスクリット語の発見に促されて、比較言語学も成立した。インド学の基盤を築いたのは、当時のイギリス東インド会社の官吏、ウィリアム・ジョーンズ（William Jones 1746-94)、チャールズ・ウィルキンス（Charles Wilkins 1749-1836)、ヘンリー・トーマス・コールブルック（Henry Thomas Colebrooke 1765-1837）たちであった。インド古典研究において、西洋のインド学者たちは、聖典を暗誦していたパンディットたちからサンスクリット語を習得し、口頭伝承されていた「語られる聖典」を学んだ。それらの聖典は後に「書物」として出版され、まさに「書かれた聖典」となった。最も早くヨーロッパ語に全訳されたのは『バガヴァッド・ギーター』であった。イギリス東インド会社の書記のチャールズ・ウィルキンスによって英訳され、1785 年にロンドンで出版された。

ちなみに、1786 年 2 月 2 日、カルカッタのベンガル・アジア協会の設立三周年記念式典において、同協会の会長で東洋学者でもあったウィリアム・ジョーンズは、ヒンドゥー教の歴史と文化に関する記念講演をおこなっている。ジョーンズはサンスクリット語の語彙や文法がギリシア・ラテン語と著しく類似している事実を挙げながら、サンスクリット語とヨーロッパ諸言語が「もはや存在しないある共通の源」から発しており、サンスクリット語がギリシア語やラテン語よりも精巧に洗練された素晴らしい構造」をもった言語であると指摘した。[2] この講演はインド・ヨーロッパ語族に関するその後の研究のきっかけとなり、その後、比較言語学、比較宗教学、比較神話学などの人文学の成り立ちに道を拓いた。その意味でも、ヨーロッパ社会にとって記念碑的な意味をもっていた。

「語られる聖典」（『ヴェーダ』聖典）とその伝承

インドの「語られる聖典」、すなわち『ヴェーダ』などの聖典は、声と記憶によって伝承されてきた。「ヴェーダ」（veda）という名詞は、動詞語根√vid から派生し、本来「知識」を意味する。『ヴェーダ』は古代インドの宗教的テクストの集成である。ヴェーダの宗教は長い年限をかけて展開していったが、その歴史の中で、一貫して重要な位置を占めていた要素の一つが「語られる聖典」の言葉であった。

「語られる聖典」の言葉を一貫して重要視するヴェーダ宗教の基盤には、正しい資格をもつ者によって正しく発話される言葉とその霊力（実現力）への絶大な信頼があった。「ヴェーダ祭式」と呼ばれる宗教儀礼には、次のようなメカニズムがある。つまり、祭官による祭火への献供と、祭官が発する定式化された言葉によって、人間と神々とのやりとりがなされる。人間が正しい作法に従って献供を行い、正しい言葉によって神々に呼びかけるとき、その言葉の発話内容は実現し、祭式に対する神々からの返礼として、祭式を通して願われた人間の願望が成就するというメカニズムである。ただ、「語られる聖典」としての『ヴェーダ』において、中性名詞「ブラフマン」(*bráhman-*）は、初期『ヴェーダ』文献では「言葉とその霊力」であったが、中期『ヴェーダ』文献になると「宇宙の最高原理（梵)」へと、語の意味が拡がっていく。この言葉とその霊力すなわちブラフマンの知識は、社会の最高位にあったバラモンたち（祭官階級）に独占されていた。知識の独占と精確な伝承を守るために、「語られる聖典」としての『ヴェーダ』は、師から弟子へ口頭伝承されていった。[3]

インド文化において、聖典を継承する手段がパロールであったこと、すなわち口頭伝承であったことで、聖典の内容や表現がその語り手によって一定しなかったとも考えられる。ところが、インドではエクリチュールによる聖典の継承よりもパロールによる伝承が重視され、世代を超えて口頭伝承された聖典が、「書物」としての聖典と比べて、その精確さにおいて、ほとんど違いがなかった。そのことは極めて注目すべき事実であろう。

こうしたインド文化における「語られる聖典」としての『ヴェーダ』の具体例は、聖典の固定的テクストがパロールによって精確に継承されてきた宗教史的な事実を端的に物語っている。これと類似した宗教現象が、イスラームやユダヤ教など、世界の諸宗教にも見られる。このことは「語られる聖典」の意義を宗教学的に掘り下げて探究するうえで興味深い事実であろう。

［註］

（1）辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』創元社、1953 年、303 ～ 308 頁。

（2）William Jones, “The Third Anniversary Discourse, on the Hindus,” in *The Works of Sir William Jones*, vol. 3, London: printed for John Stockdale and John Walker, 1807, p. 34.

（3）後藤敏文「古代インドの祭式概観―形式・構成・原理―」『総合人間学叢書』（第 3 巻)、東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所、2008 年、315 ～ 360 頁。梶原三恵子「聖なる〈ことば〉の伝承―古代インドのヴェーダ学生をめぐって―」『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』26、2013 年、47 ～ 48 頁。

遺跡からのメッセージ（63）

大和の文化遺産を学ぶ①　―杣之内キャンパス周辺から―

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

天理大学では2020年度秋学期の開始にあたり、感染症対策を整えたうえ、基本的に対面型の授業を実施することになった。久しぶりに学生たちの姿が戻り、賑やかさを取り戻したキャンパスは、すっかり秋模様で、図書館前の銀杏並木も次第に色づき始めている。しかしながら、今年度の秋学期から私が新しく担当する「大和の文化遺産を学ぶ３」（文学部共通科目）は、受講生が50名を超え、大学の基準に従って、オンライン（オンデマンド型）で行うことになった。同科目は１～５まであり、それぞれ、文学、語学、歴史学、考古学、民俗学を専門とする教員が担当して授業を行うのだが、私の場合は考古学の観点から大和の文化遺産を取り上げることになる。

初回の授業では、まず、杣之内キャンパス周辺がいかに文化遺産と歴史的環境に恵まれているかを確認する。今年の６月、［AERAムック］『大学ランキング2021年版』（朝日新聞出版）の大学図書館ランキングの総合評価で、天理大学が堂々１位を獲得したというニュースが伝わった。そのランキングに大きく貢献したのは、附属天理図書館の150万冊に及ぶ蔵書数と数々の稀覯書で、『日本書紀』（神代巻）、『播磨国風土記』など蔵書６点が国宝、86点が重要文化財に指定されている。リニューアルされた公式ホームページで指定書一覧を見ると、そのうちの一点、『源氏物語』（池田本、鎌倉末期写）は、つい最近、平成30年（2018年）に新しく重要文化財に指定されたことがわかる。このように、附属天理図書館は、まさに「やまとのふみくら」、書籍の博物館とも言える様相を呈し、年々その価値は高まるばかりなのだ。貴重な蔵書の数々は、フルカラーの高精細の複製影印を収録した『新天理図書館善本叢書』全36巻（八木書店）が刊行されるとともに、平成29年（2017年）、「天理図書館古典の至宝」として、新指定の『源氏物語』も含め、75点が附属天理参考館の企画展示室で一般公開された。

一方、附属天理参考館には、重要文化財に指定された考古資料の埴輪２点を含め、「世界の生活文化」「世界の考古美術」に関する多くの貴重な資料が収蔵展示されている。『大学ランキング2021年版』に大学博物館ランキングの項目はないが、もし、あったとすれば、上位にランキングされるのは間違いないと思われる。近年、多くの大学で、大学ミュージアムが設置されるようになってきているが、資料の充実度という点で群を抜いているからだ。欧米にならって、大学と図書館、博物館を並び立てた創設者、中山正善２代真柱の先見の明には頭が下がるばかりだ。

授業では、続けて、附属天理図書館・参考館の資料から、杣之内キャンパス周辺の文化遺産にちなんだものを１点ずつ取り上げて説明する。附属天理図書館のホームページでは、「やまとの名品」として貴重書を紹介する記事（養徳社『陽気』に連載中）が掲載されていて、その中から、第90回「内山永久寺之図」（安井文庫）を選択する。加藤重光氏（元天理図書館司書）が記事で解説するとおり、この絵図は、「廃仏毀釈」によって明治８年（1875年）に廃寺となった永久寺の江戸期の姿を明治に書き写した貴重な史料で、のちに石上神宮に移築されて摂社出雲健雄神社拝殿（国宝）となった鎮守拝殿の様子も描かれている。多数の堂宇が立ち並んでいた永久寺の跡地は、今は田畑となって考古学的な遺跡に姿を変え、地表にはわずかに「本堂池」が残るだけだ。

附属天理参考館のホームページでは、「参考館セレクション」として、約30万点の収蔵資料からセレクトされた約100点が紹介されているのだが、今回のお目当ての資料は、「世界の考古美術」の「布留遺跡」のページに解説記事がある。また、ホームページのコンテンツ「参考館動画」でも、『天理参考館のこころ』（６）として、近江昌司・天理大学名誉教授が詳しく資料の解説を行っている。その資料とは、附属天理図書館の東南約800ｍ、昭和56年（1981年）、親里競技場の建設に際して発掘調査が行われた杣之内火葬墓から出土した一面の海獣葡萄鏡だ。伏せた獣の形をした鈕（ちゅう）の周囲に、４頭の獣を並べ、西アジアから中国に伝わった葡萄唐草文で全体を飾るほか、外周には、12羽の鶏と２匹の蝶が配されるという特徴を持つこの鏡は、唐代に愛好された海獣葡萄鏡の中でも中型品の優品だ。天理駅前のレプリカ（実物の５倍の大きさ）でもおなじみのこの海獣葡萄鏡は、これまでに18面の「同型鏡」が知られているが、そのうち３面が天理参考館に収蔵されている。

ところで、この鏡が出土した杣之内火葬墓の被葬者と推測されるのは、近江名誉教授によると、奈良時代後期に高級官人として活躍し、文人としても誉れ高い石上宅嗣（いそのかみのやかつぐ）卿だ。桓武天皇の即位間もない天応元年（781年）に53歳で没した石上卿は、逆算すると、天平元年（729年）生まれとわかるが、天平宝字６年（762年）、平城京内の邸宅内に建てた阿閦（あしゅく）寺の傍らに、中国伝来の仏教書やその他の書籍を集めた文庫、「芸亭（うんてい）」を設置した。広く好学の士に開放された「芸亭」は、日本最古の公開図書館として知られ、昭和３年（1928年）、日本図書館協会、奈良県図書館協会等が発起人となって「石上宅嗣卿顕彰会」が発足し、昭和５年（1930年）に開館した天理図書館の前庭に、石上朝臣宅嗣卿顕彰碑が建設された。碑文の撰文を行ったのは、京都帝国大学附属図書館長だった新村出博士。図書館のホール内には石上宅嗣卿彫像も設置され、その説明板では、かつて山辺郡石上郷と呼ばれた同地との縁に触れている。

写真　図書館前に建立された石上宅嗣卿顕彰碑

ちょうど今年は、天理図書館の開館90周年にあたり、坂静雄・京都帝国大学教授の設計による図書館の建築そのものも、すでに歴史的建造物としての価値を有している。キャンパス内とその周辺の文化遺産に改めて注目する必要がある。

閑話：熱帯雨林の話

国際学部教授
おやさと研究所兼任研究員
森　洋明　*Yomei Mori*

今回は少し話題を変え、アフリカの熱帯地域に広がる森について触れていきたい。

コンゴ共和国は赤道直下の国で、首都ブラザヴィルは南半球にある。首都の北側には広大な平原が広がっている。初めて見た果てしなく続く平原とその向こうに広がる地平線は、実に感動的で、まさに「アフリカのサバンナ」というイメージと重なる。象やキリンが悠然と歩いていても決して不思議でない光景なのだが、残念ながら野生動物はほとんど見かけることはない。

コンゴで野生の動物と出会うには、さらに数百キロ北へ行く必要がある。そこはコンゴやガボン、カメルーンなどにまたがる熱帯雨林で、ゴリラなどさまざまな霊長類の他、ワニやカバ、象などが生息している。アフリカ大陸の歴史によれば、現在のナイジェリア地域にいたバンツー人が大陸全体に広がる過程で、赤道付近にあるこの熱帯雨林地帯は避けられていったようである。そのことによりガボンからコンゴ、アンゴラに広がった西バンツー系とケニアやタンザニア、モザンビークへと広がった東バンツー系に分かれた。狩猟採集民がいるこの広大な熱帯の森に農耕民であるバンツー人が入っていくのは6世紀以降になってのことだった。

私はこの熱帯の森にまだ足を踏み入れたことはない。しかし、森に関わる興味深い話を多くの人から聞いた。ここでは、そのなかの3人を紹介していこう。

その一人は、高野秀行氏である。1988年の春、彼は早稲田大学の探検部のリーダーとして、コンゴの北にあるテレ湖に生息するという「モケレムベンベ」と呼ばれる珍獣の発見を目指していた。「ネッシー」ほどメジャーではなかったが、探検部たちの珍獣発見にかける意気込みは本物だった。珍獣を熱く語る高野氏の姿に、珍獣は本当にいるかもしれないと私も期待した。森のなかで1カ月余りの野営キャンプを張っての観察を敢行したようだが、結局発見には至らなかった。首都へ戻ってきた探検部員の疲労困憊した姿から、「原始」の森の過酷な生活が想像された。なお、このときの探検の記録は『幻の怪獣ムベンベを追え』（早稲田大学探検部、PHP研究所、1989年）にまとめられている。

2人目は、コンゴの北の森で象による農業被害を調査した萩原幹子氏である。この地域に生息する象は、マルミミ象と呼ばれ、密林のなかでも移動しやすいように小柄で耳が丸いのが特徴だ。絶滅危惧種に指定されており保護の対象になっている。保護区が設けられたが、人の生活空間と重なっているところがあり、そうした集落には狩猟採集民もいれば農耕民もいる。彼らの農地を象が荒らすという被害が起きている。萩原氏はこうした象の被害の実態調査を行った。野生動物と人間の共存の難しさを感じた。彼女はこの調査のために5年、北の森で地元の人のなかで生活をしたという。彼女の流暢なリンガラ語から、いかに住民に溶け込んで調査を行っていたかを窺い知ることができる。この調査に関する内容は、来年おやさと研究所から出版される『エコロジーと宗教性の深化』に掲載される予定である。

3人目は天理大学国際学部の服部志帆氏である。コンゴではないが同じく熱帯の森に住む狩猟採集民の調査を行っている。文化人類学者の彼女は、森の住民たちと共に暮らしながら調査をしている。その彼女が今年4月、『アフリカの森の女たち　文化・進化・発達の人類学』（原文著者：ボニー・ヒューレット）という本（翻訳）を3人の共訳で出版した。この本は本誌6月号でも紹介されたが、ここでも内容について簡単に紹介したい。

この本の中に登場する女性は4人。狩猟採集民と農耕民の2人ずつの計4人である。どちらも熱帯雨林に居住していて、その生活にはさまざまな面で相違点や共通点がある。年齢層はどちらのグループも40代と70代の女性であり、同一グループにおける世代による違いを同時に感じることができる。「この本の核をなすのは、生活、過去、現在について詳しく語るコンゴ盆地の女性の声」と原文の著者は言う。

実際に「ねえ、聞いて」という女性の日常の生活空間での「語り」に多くのページが割かれており、フィールド研究における聞き取りというようなものではなく、女性自らが自発的に語るまさに「おしゃべり」だ。だからこそ、彼女たちの「語り」は、生活の赤裸々な描写が満載で、思春期を迎え異性を意識するようになる少女の胸の内、初めて夫と過ごす夜の心境、夫婦の夜の営みの描写、家庭内暴力の様子など、その内容はリアリティに溢れている。読んでいくうちに何か近くの出来事のようにさえ感じられる。

これまで知ることがなかったアフリカの「奥地」での、女性たちの生活の生の「語り」には、一人の人間が一生のなかで経験しうるさまざまな出来事が含まれており大変興味深い。そしてそこには、「先進国」と言われ、熱帯雨林とはまったく異なる生活空間にいる私たちと共通するものも少なくないことにあらためて気づかされる。

また、本書にはさまざまな学術的専門用語が出てくるが、こうした用語には註釈や解説がある。専門家でなくてもアプローチしやすいように配慮されてのことだろうが、そこにこの本の訳者たちの思いが感じられる。訳者の3人は著者自身と同じ熱帯雨林の森をフィールドとする研究者で、そのアフリカの魅力を多くの人に伝えるため日頃からさまざまな活動をしている人たちでもある。「この本が学術書としての価値だけでなく、遠く離れた日本に暮らす読者にとっても現代社会を生き抜くためのヒントが詰まったもの」（訳者あとがきより）という見方から、フィールドワークを通じて、現地の人たちから多くの学びを得ている研究者としての姿勢が伝わってくる。さらに、こうした地域を研究している人たちの体験などを綴ったコラムも盛り込まれ、「アフリカの森の女たち」が語る生活空間にさらなる深みを醸し出しているように感じられる。

珍獣の話題から動物と人間の共存、そして同じ人間同士の関係性へと、熱帯の森の話は実に奥が深い。現在、高野氏は「元祖珍獣ハンター」と呼ばれ、ノンフィクション作家として活躍している。萩原氏は「世界の村で発見・こんなところに日本人」（朝日放送）などに登場し、今もコンゴを拠点に通訳やコーディネーターとしてさまざまな活動を続けている。私もいずれ北部の熱帯雨林へ行ってみたい。ただそのときは、服部氏のように森の民と一緒にする「サバイバル」な生活も魅力的ではあるだろうが、現地住民の案内の下で、マルミミ像に乗っかって、モケレムベンベを見るツアーがいいかなと秘かに思っている。

スポーツの歴史と文化（3）「走る」その3

天理参考館学芸員
幡鎌　真理　*Mari Hatakama*

天理参考館創立90周年特別展「スポーツの歴史と文化」は、新型コロナウィルス感染症流行に伴い、紆余曲折を経ながらも無事閉幕を迎えることができた。今回で「走る」についての一考を終えたい。

思えば、現代は「走る」ことが社会に広く受け入れられている。一昔前までは決してそうではなかった。古来、人が「走る」のは出会いや別れの局面で、急がなくてはならないとき、それも生命の危険が迫ったときに限られていた。そこには普通でない、常ならぬ事態が発生している。武士は刀を佩（はい）することもあって、通常走ることは厳に戒められていた。社会的に「走る」ことをよしとする文化ではなかったのである。確かに前回までに述べたように、古代オリンピックで勇士が疾走することは神を喜ばせたし、マラトンの戦いでの勝利の吉報は兵士の激走でもたらされた。しかし、『国家』の中でプラトンは、有名なたいまつ競走の記述の後で、通りを急ぐ知人を見つけたときに召使いを走らせて呼び止めさせている。主人つまり自由市民は走らないのである。彼らはスタディオンでは走るが、日常では走らない。そして勝利の吉報を告げた兵士は力尽きて絶命した。日本でも、曰く「事を知り世を知れれば、願はず、走らず、ただしずかなることを望とし、うれへ無きを楽しみとす」(『方丈記』)。名利に走れば加速し、極まれば疲れて倒れる。心穏やかに過ごせば憂いもないということか。

古典文学に登場する人びとは、現代人のようにスポーツとして「走る」ことはありえない。特別な芸能や戦など非日常的な場面で起こる特殊ケースである。スポーツとも言える蹴鞠でも、走って鞠を蹴るのは好ましくない。鞠の動きを注視して、落下するであろう場所を推測して予め移動しておくのが良しとされた。バタバタと袖を振って走り込んで蹴るなど「品無きさま（下品）」であった。『源氏物語』の研究者によると、紫の上の登場、光源氏との出会いが鮮烈だそうだ。「中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの、なえたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり」(若紫)。貴族の姫君が十歳にもなって走ることはあり得ず、それだけに紫の上の特別性を際立たせているというのだ。光源氏はこれを不快に思わず、その後少女を深く心に留めることになる。「走る」女性といえば、日本では、黄泉の国でイザナギを追いかけるイザナミや、安珍を追って遂には大蛇に化身する清姫など、恐ろしげな事例が想起される。もっともそれらは不実な男性の行為に起因するものだが。一方、郷土玩具に見られる「牛に引かれて善光寺参り」の信心深い逸話もある。信濃に住む七十歳あまりの無信仰な老女が晒していた布を牛に奪われ、逃げる牛を追いかけたところ善光寺にたどりつき、以後は心を入れ替えて参詣するようになったという『今昔物語集』の中国の逸話に遡る言い伝えだ。これは俗世の無信心な老女ではなくなり、仏道に精進する善人への変身を「走る」行為で表している。ゆったり歩くのでは成し得ず、「走る」ことでそれまでの自分と縁を切ったのだ。館蔵品にある郷土玩具は頭に白い筋を描いた車付きの牛の張子玩具で、人びとは老女は登場せずともこの故事を想像できたにちがいない。

海外の「走る」女性は一層逞しく、アポロードスの『ギリシア神話』に登場するアタランテーの配偶者を選ぶ方法がランニングである。求婚者たちをまず走らせ、自分は武装して後から走る。追いつかれた求婚者はその場で殺され、追いつかれなかった男性と結婚したという。なんとも凄まじいが、頑強な子孫を残す意図が垣間見える。

頑健さと「走る」の関連を示す例として、これは男性にまつわる資料だが、最後に館蔵品を紹介する。台湾先住民族パゼッヘの人びとは、米の収穫を終える頃、祖先の霊魂を祭る儀式を行う。実りの収穫も狩りの収獲も、祖霊の加護によるものと感謝を捧げるのである。18世紀以降、清朝の支配を受け入れて平野の開拓に心血を注いだが、それは古来鹿追で鍛えられた健脚の賜物であったろう。収穫を終え、狩猟生活に入る節目に催される祖霊祭では健脚を競う「走鏢（そうびょう）」を行う。3、5、7人などの奇数人数を一組として8kmから12kmを競走する。ゴール地点には優勝旗（図1）を掲げ、栄えある勝者に授与された。日本統治時代に一旦廃れるが、1990年代以降の文化復興運動の高まりで復活し、農暦の11月の新年を迎える今頃に毎年開催されている。

図1　伝統的競走競技「走鏢」の優勝旗「冠軍旗」
台湾　20世紀　長108.0cm

世界の民族文化では「走る」こと一つをとっても多様な様相を呈する。時間に追われて日常的に「走る」現代人ではあるが、ランニングは楽しみの範囲にとどめ、心穏やかに過ごしたいものである。100年後（いや10年後だろうか）にはAIの働きによって人びとは身体を動かすことさえなくなり、「100年(10年)前はなんとバタバタと走り回っていたことか」と評価されるのだろうか。

〈図は天理参考館蔵品〉

図書紹介（120）

シモーヌ・ヴェイユ著、今村純子訳、

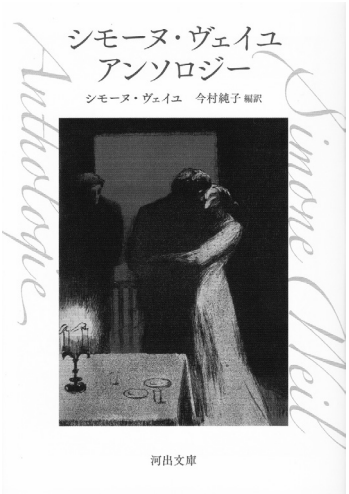
『神を待ちのぞむ』（河出書房新社、2020 年）

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

本書は、「須賀敦子の本棚」シリーズ全９巻（池澤夏樹監修）の第８巻として刊行された。須賀敦子（1929 ～ 1998）は著名なイタリア文学者・エッセイストであった。このシリーズは、彼女の思想の核になった作家・詩人・思想家の著作として刊行されている。ただし、読者は彼女の名前やこのシリーズの意味合いにとらわれずに、本書を読むことができる。ヴェイユの精神世界に入っていくためには、むしろそのほうが良い。

シモーヌ・ヴェイユ Simone Weil（1909 ～ 1943）は、第２次世界大戦のさなか、34 歳の若さでロンドンに客死したフランスの哲学者である。彼女の精神世界が広く知られるようになったのは、彼女の遺稿を発見し、それを大切な「預かりもの」として我々の許に送り届けてくれた、友人の哲学者Ｇ・ティボンやペラン神父の尽力によるものだ。

本書は、ペラン神父による 1950 年の初版に基づき、ヴェイユ研究者の今村純子氏が新訳したものである。索引等も含めると 500 頁にもなる大部の書である。ペラン神父の序文に続き、ヴェイユの手紙６通（最後の１通にはペラン神父の返信がある）、そして有名な「神への愛と不幸」を含む５編の論考が掲載されている（本文部分は約 320 頁）。その後に詳細な訳註（90 頁）、訳者解題及びあとがき（60 頁）があり、監修者解説、主要文献一覧、ヴェイユ略年譜、索引（事項・人名及び神名）が付されている。

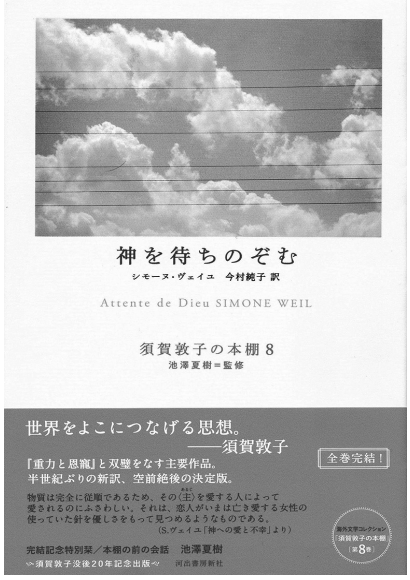


『シモーヌ・ヴェイユ・アンソロジー』

これに関連して、今村純子氏編訳の『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』（河出文庫、2018 年）がある。この本とも合わせて読めば、ヴェイユの精神世界の核心部分を捉えることができるので、こちらもお勧めしたい。

さて、本書を一読して誰もが気付く点がある。それは、ヴェイユを紹介するペラン神父の言葉とヴェイユ自身との間の不思議な距離感である。近いと言えば近い。ヴェイユはカトリック教会の門口に立っているのだから。しかし遠いと言えばこれほど遠いものはない。ヴェイユは真理を教会の内ではなく、真理そのものの内に求めていたのだから。神父は、真理はカトリシズムにあると、教会の中から手招きをしている。ヴェイユもまた自らの内省の中で、洗礼を前にした「ためらい」を示している。

しかし、彼女の「ためらい」は、別の傾きにも大きく振れるものだった。ペラン神父と別れてイギリスに渡航した際、海の方角を指し、友人に笑ってこう語ったという。「もし、わたしたちが魚雷攻撃を受けて沈んだら、ここがすばらしい洗礼堂になるわよ」と。ペラン神父との意識のずれは、ヴェイユの最後の手紙、そして投函されなかった神父の最後の手紙まで、振幅する変奏を伴って存在している。



ペラン神父は、ヴェイユが「洗礼志願者」として亡くなったと、名残惜しそうに書いている。ヴェイユの良き理解者でありながら、彼が最後までそのような姿勢を取り続けたのはなぜだろうか。それは、「教会の外に救いなし」という排他主義的態度を取ってきた第２バチカン公会議（1962 ～ 1965）のカトリック教会をその背景に置いて考えると、よりよく理解できるだろう。ペラン神父は、この枠組みの中から出ることができなかったのだ。第２バチカン公会議後、宗教間対話に熱心となり、包括主義的態度に切り替わった現代のカトリック教会においても、本音の部分は「教会の外に真の救いなし」という立場には変わりないが（それはどの宗教でも同様である）、もしヴェイユとペラン神父が現代に生きていたら、二人の精神的対話も大きく変わっていただろう。

だが、私はむしろ、当時のカトリック教会の枠組みの中にありながら、教会とは関わりなくキリストの愛と十字架の意義を考えるヴェイユに着目したペラン神父の炯眼を高く評価したい。ヴェイユが教会の門口に佇んだように、ペラン神父もまた内側から教会の敷居まで歩み寄ったのである。

本書の論考中、最も宗教的で最も感動的なのは、「『主の祈り』について」と題された４番目の論考だろう。福音書の「主の祈り」のギリシア語原文を一行ごとに引きながら、ヴェイユは独自の読解を試みている。そこには教会も洗礼も出てこない。語られるのは父なる神、神の国、そして「わたしたちのパン」である。このパンはキリストを指し、天空に源泉を持つ糧（かて）である。眼差しは真っ直ぐにキリストに向けられ、そこからこの世を超えたエネルギーを受けることを目指している。実は、キリストは「わたしたちの魂のすぐ近く」にいる。そして、「わたしたちが同意するならば、キリストは入ってくる。だが、わたしたちが欲しなくなるやいなや、キリストはすぐさま立ち去ってしまう」（294 頁）。

これと似た言葉を、ヴェイユは２番目の論考「神への愛と不幸」の中で、より戦慄を覚えさせるような仕方で語っている。「わたしたちが神の訪れに耳を貸さないでいると、神は物乞いのように何度もやって来る。だがまた物乞いのように、ある日を境にもうやって来なくなる。」これは何と恐ろしく響いてくる言葉であろうか。しかし彼女はすぐに続けて書き記す。「神の受け入れに同意するならば、神はわたしたちのうちに小さな種を蒔き、立ち去ってしまう。この瞬間から待つことを除いて神がすべきことは何もないし、わたしたちもまたそうである」（以上、194 頁［『アンソロジー』では 261 頁］）。「神を待ちのぞむ」という言葉に込めたヴェイユの万感の思いは、この文章の中に尽きている。

第 333 回研究報告会（9 月 29 日）「文書のなかの障害者像」

八木三郎

「障碍（がい）者」の表記を過去に遡って検証するなか、多くの「障害者像」を至るところで確認できる。

研究報告会では前半の部分で、平安時代末期から鎌倉時代初期に描かれた絵巻物に登場する障害者や当時の種々の奇病や治療法などの事例を紹介した。

また、絵巻物以外にも各地の民話や浄瑠璃の世界などにも障害者を題材にしたものがあるなど、庶民生活のさまざまなところで確認することができる。江戸時代では、人々が楽しむ俳句や川柳の分野でも障害者を題材にした句が詠まれている。人々にとって障害は奇異なことではなく、普通のこととして捉えられていたのではと読み取れる。

また、歴代の徳川将軍 15 人のうち、第 9 代将軍・徳川家重、第 13 代将軍・徳川家定の 2 人が重度の脳性マヒがあったことなども、日本に滞在した当時の外国人の手記などから紹介した。

後半の部分では、天理教の原典である「おふでさき」「おさしづ」、また『稿本天理教教祖伝逸話篇』にある障害表記から縷々考察するつもりであったが、時間の関係で「おふでさき」における表記事例だけを取り上げた。意味的解釈については『おふでさき註釈』をもとにし、そこに筆者の解釈を加えて発表した。

第 21 回宗教倫理学会に参加

堀内みどり

10 月 3 日、標記学術大会が開催された。本大会は、当初天理大学を会場として開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、学会事務局が主導するオンライン開催となった。実行委員長は堀内が務めたが、実際の Zoom システムを利用した大会運営は、事務局が担当した。予定していた公開シンポジウム及び懇親会は中止となり、会員総会もオンライン開催となった。

学術大会のテーマは「『心』から宗教を問う」であった。これは学会の 2020 年度の研究プロジェクトのテーマ「『心』から宗教倫理を問う―日本宗教の現状と課題を中心に」に準じたもので、午前に 4 人、午後に 2 人が発表し、澤井義次氏が午前第 2 組の司会を担当した。参加者は 30 名。

研究発表後の会員総会では、評議員の改選結果が報告され、15 名で組織する新たな評議会のメンバーが承認された。その中から、新会長として京都大学の氣多雅子氏が選出され、会長挨拶。また、今回の学術大会まで会長を務めた芦名定道前会長が退任の挨拶を行った。芦名前会長は、新型コロナウイルス感染拡大という予期しない状況の中での、研究や学会運営、学会活動について触れ、特に夏の恒例活動となっている 1 泊 2 日の夏季研修を 1 日の日程で Zoom を利用して行ったこと、また、Zoom 利用だった結果、ドイツ在住のカティア・トリプレット教授（ライプチヒ大学）がコメンテーターとして参加できたことに言及した。

なお、来年度通常の大会開催の場合は、天理大学を会場として開催予定である。

第 79 回日本宗教学会に参加・発表

堀内みどり

標記大会が、9 月 18 日から 20 日の日程で開催された。駒澤大学に大会実行委員会を設けたものの、新型コロナウイルス感染症予防のためキャンパスが使用できなくなり、研究発表と会議は Zoom を用いたオンライン（8 部会）開催（研究発表の一部は紀要号への要旨のみの提出）となり、さらには大会シンポジウムを YouTube による収録済み動画の限定配信に代えるといった開催形態となった。会員の参加登録者が 427 名、報道関係者等の非会員登録者が 6 名、シンポジウム動画の視聴回数 250 回以上（実行委員会発表）だった。大会シンポジウムの動画配信は 16 日（水）～ 20 日（日）の 5 日間実施された。

大会シンポジウムのテーマは「近現代日本の仏教―戦前・戦後のアジアにおける連続性と断絶―」で、「近現代のアジアという文脈において、日本仏教はどのような展開を見せたのか。アジア各地の仏教やその他の宗教とどのような接点を持ち、その出会いはどのように受け止められ、どのようなすれ違いや影響関係が生じたのか。またトランス・ナショナルな現象としての近現代の日本仏教は、戦前と戦後における断絶とともに、現在にまで至るどのような連続性を帯びているのか」という問題意識のもと、坂井田夕起子客員研究員（愛知大学国際問題研究所）、小島敬裕教授（津田塾大学）、ランジャナ・ムコパディヤーヤ准教授（デリー大学）の講演が動画配信された。

天理大学からは、澤井義次氏がオンラインで発表、堀内は紀要号への要旨のみの提出という形で研究発表を行った。発表題目は以下の通り。

澤井義次「井筒・東洋哲学とオットーの宗教論」
堀内みどり「イメージされる教祖像―『稿本天理教教祖伝逸話篇』を読む―」

『グローカル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は 1 月号からとなっております。購読料については、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メールでお願い致します（お電話での申し込みはご遠慮下さい）。毎月の希望冊数と、氏名（フリガナも）、郵便番号、住所、電話、FAX、E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を送付致します。切手・現金でのお支払いはご遠慮くださいますようお願い致します。振込みを確認後、発送させて頂きます。

送料（ヤマト運輸 DM 便）
全国一律 167 円（角 2 封筒、重さ 1 kg〔約 20 冊〕まで）
【例】毎月購読 167 円× 12 カ月＝ 2,004 円

問い合わせ先：
〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050
天理大学 おやさと研究所「グローカル天理」編集部
FAX 0743-63-7255
E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

天理大学おやさと研究所
2020 年度公開教学講座

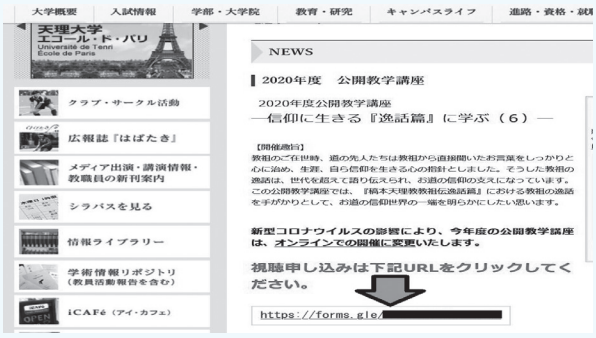
信仰に生きる　『逸話篇』に学ぶ（６）

本年度の公開教学講座はオンラインでの開催となりました。
第２回目の配信は 11 月１日～ 11 月 15 日です。

オンラインでの視聴方法

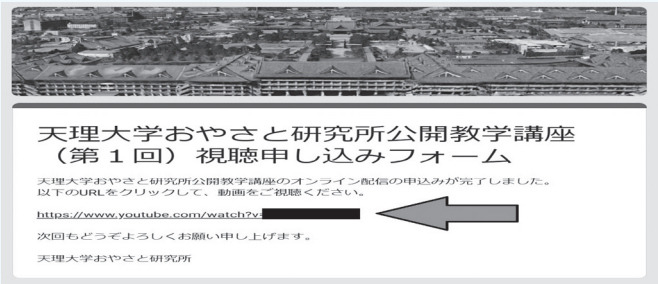
① おやさと研究所のホームページへ

②「視聴申し込みはこちら」をクリック



③ 申し込みフォームに記入

④ 送信後、動画の URL が表示されます



⑤ URL をクリックして、ご視聴ください

第１回（10 月）：
　永尾教昭所長
　75「これが天理や」

第２回（11 月）：
　佐藤孝則研究員
　77「栗の節句」

第３回（12 月）：
　岡田正彦研究員
　88「危ないところを」

第４回（１月）：
　澤井真研究員
　93「八町四方」

第５回（２月）：
　八木三郎研究員
　106「蔭膳」

第６回（３月）：
　堀内みどり主任
　103「間違いのないように」

グローカル天理
第 21 巻　第 11 号　（通巻 251 号）
2020 年（令和２年）11 月１日発行

発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University